

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する調査研究(2年次)
 —深い学びにつながる授業づくり—

「深い学び」がよく分からないという現場の声を受けて、令和2年度からこの研究を進めています。

1年次、授業の中で「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」それぞれを見取るうちに、「教科の見方・考え方」を加えて、関連付けながら授業が形成されることで、「深い学び」が生じ、子供の「資質・能力を育む」授業に近付くことが見えてきました。そして、教師の「問いかけ（子供の思考を促す教師の働きかけ）」がさらに重要だと考えました。

そこで、2年次、

「習得・活用・探究」の学びの過程で、教師が適宜・適切な「問いかけ」をすることで、子供は一人一人学びを深めていくことができる。

を

仮説におき、6年生国語科の学習を中心に、

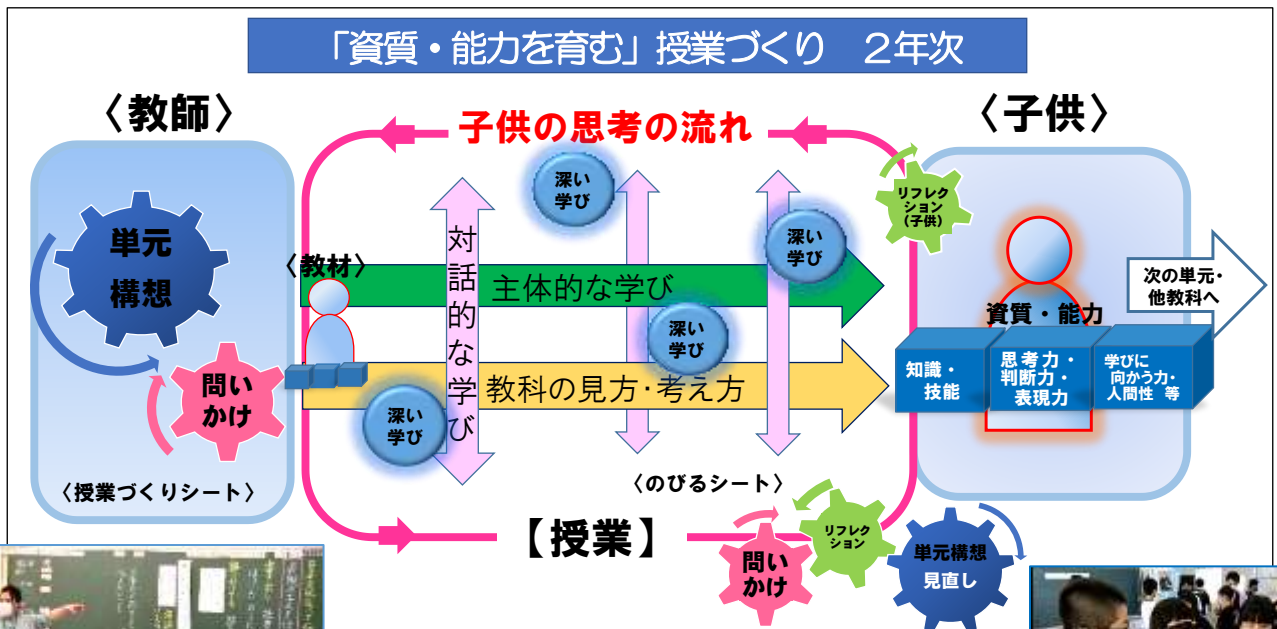
単元構想で、単元を通し子供の「主体的・対話的で深い学び」の具体的な姿をイメージする

教師が本時、子供の思考の流れを意識した問いかけを行う

授業の姿や学びから、子供も教師も、リフレクションする

の3つの視点で授業づくりを考えていきました。

授業の主役は子供たちです。その一人一人が、学びを深められるように、教師が「子供の思考の流れ」を十分意識した授業づくりが「資質・能力を育む授業」につながるのです。



「既有知識を確認する導入」

今年度、現場の先生に役立ててもらえるような資料もいろいろ作成・改善しました。それらも含め、2年間の研究を通して分かってきたことを、報告します。



「学びを共有するグループ活動」

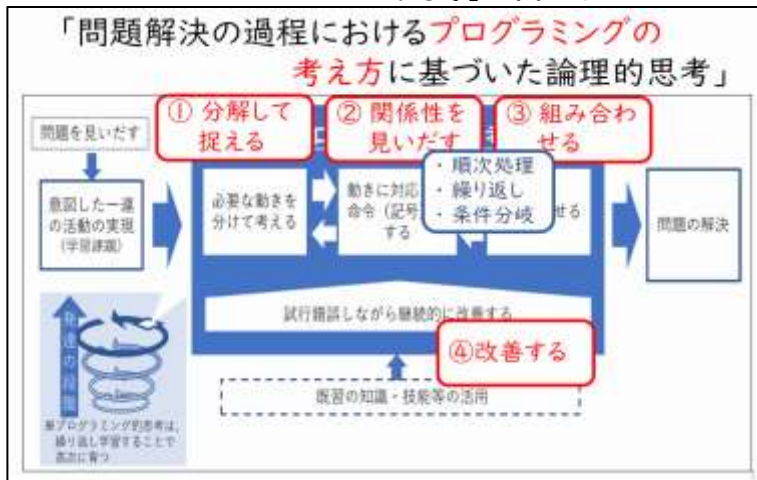
小学校における情報活用能力の育成に関する調査研究（2年次） — プログラミング教育を中心として —

学習指導要領に、学習の基盤となる資質・能力の一つとして情報活用能力が位置付けられ、小学校におけるプログラミング教育が全面実施となりました。このプログラミング教育の実践に際し、先生方からは、「プログラミング的思考って何?」「授業では、何を大切にすればよいの?」「どの学年のどの教科のどの単元でどのように行えばよいの?」などという声が聞かれます。そこで、情報活用能力の育成に向けたプログラミング教育の実践への一助となることを目指し、次の4つの研究に取り組みました。

- ・ 研究1 「プログラミング的思考」を具体化
- ・ 研究2 プログラミング教育の「授業実践のポイント」を明確化
- ・ 研究3 教科の授業におけるプログラミング教育の「授業パッケージ」を作成
- ・ 研究4 小学校におけるプログラミング教育の「カリキュラム例」を作成

研究発表会では、「プログラミング的思考」の捉え方と「授業実践のポイント」について提案し、「授業パッケージ」を活用した4つの授業実践と「カリキュラム例」を紹介します。

「プログラミング的思考」の捉え方



「授業実践のポイント」

- ・ポイント① **ねらいの設定**
教科等のねらいの達成が促進される部分にプログラミングの体験を取り入れることで、教科のねらいを達成しつつ、プログラミング教育のねらいも達成する。
- ・ポイント② **プログラミング的思考の育成**
プログラミング的思考を具体化した考え方をキーワード化し、明示的に指導する。
- ・ポイント③ **プログラミング教材の選定**
プログラミング教材は、児童の実態やICT環境、授業のねらい等に合わせて選ぶ。
- ・ポイント④ **プログラミングの体験**
実現したい動作のイメージが明確になるよう支援し、プログラミングの体験における試行錯誤の場面を設定する。
- ・ポイント⑤ **振り返りのもち方**
本時のねらいに迫ることができるよう活動の振り返りを設定する。

「授業パッケージ」を活用した授業実践



第2学年 音楽科「おまつりの音楽」

第3学年 体育科「リズムダンス」

第4学年 社会科「避難所シミュレーション」

第5学年 図画工作科「デジタルアート」

児童生徒の人間関係の課題に対応した育成プログラムに関する調査研究

(1年次)

－教師は人間関係をどう捉えて何を課題としているか－

教育相談部では、児童生徒の人間関係の課題に対応した予防的・開発的なカウンセリングとして、クラス単位で実施する「育成プログラム」を開発し、学校からの要望で実施する学校支援訪問研修（教育相談部の担当は、教育相談訪問研修）や教育相談部が主管する講座等で、学校現場での活用を支援してきました。

最初の開発からの時間が経過し、児童生徒をめぐる社会的な環境や学校に求められる課題の変化、そして、育成プログラムの背景理論の新たな知見等により、対応すべき課題やそれに応じた内容、活用方法が十分でなくなっている可能性が考えられます。

そこで、教師が児童生徒の人間関係をどのように捉えているかを手がかりに、育成プログラムを刷新し、学校現場が向き合う課題に対応できるよう、教育相談訪問研修の枠組みの再編も含めて検討することとしました。

対象とする育成プログラムは、表のとおりです。いずれも、授業実践のための「学習プログラム」と、育成プログラムの理解と活用方法を学ぶ「教員研修プログラム」で構成されています。学校支援訪問研修では、主に「教員研修プログラム」を使って実践のための事前研修を行い、それを基に、先生方がそれぞれに「学習プログラム」を活用するという展開です。

学校支援訪問研修のメニューは、現在、育成プログラム別で示していますが、学校現場の具体的な課題への対応につながるよう、課題別に再編できないかを検討しています。

1年次の研究では、日々児童生徒に向き合い実践し続ける先生が、児童生徒をどのように捉えているかを明らかにし、それを手がかりに「教員研修プログラム」の見直しを行っています。

研究発表会では、育成プログラムの修正の方向性と、具体的な修正点を示し、みなさんと共に育成プログラムの内容や今後の教育相談訪問研修再編の見通し等について検討したいと考えます。

表 教育相談部が開発し、学校支援で提供する育成プログラム一覧

育成プログラム名	開発年度	内容や特徴	現状の問題点
ソーシャルスキル・ トレーニング	H14-16	社会的スキルの習得 (未学習・誤学習への対応)	技術の習得を成果と考えやすい 日常での般化の困難
ストレスマネジメント教育	H17-19	感情の肯定的な自覚とそのコントロール	ストレスや感情を否定的に捉える 感情表現を抑制しがちになる
アサーション・ トレーニング	H20-23	他者と折り合う自己表現 自他の尊重	他者の尊重を優先して、自己主張を躊躇する
対人関係ゲーム	H26-28	個と集団の関係性の理解とはたらきかけ	関係性の理解の困難 個より集団を優先しがち
セルフ・エモーション・ アプローチ	2019-R2	感情への気づきとあるがままの自分の受け入れ	行動変容への期待の強さ 成長停止と考えられがち